

表絵師・勝田竹翁の御用について

《孔子・顔子・曾子像》と共箱からみる制作活動

中村 玲

はじめに

東京国立博物館には、勝田竹翁（陽溪とも。生没年不詳）が万治四年（一六六二）に描いた《孔子・顔子・曾子像》（以下、東博本と略記。図1）が所蔵される。儒学の祖である孔子（前五五一―前四七九）とその弟子の顔子（前五二二―前四八三か）、曾子（前五〇五―前四三六）が描かれている東博本は、詳細な調査が長らくの間なされていなかった。

執筆者は以前、この東博本についての報告を行い、本図は竹翁作品の中でも、後述する《曾我物語絵巻》（米国・ボストン美術館蔵、万治三年）とともに、制作年が明らかな極めて貴重な作品であることを指摘した¹。保存状況は良好であり、その図様的特徴からも然るべき場所に奉納された後、嚴重に管理され、孔子を祀る儀式・積奠等の機会にのみ開帳された礼拝像であると見なした。

筆者である勝田竹翁は、江戸時代前期、特に明暦期から寛文期（一六五五―一七三）頃を中心に、奥絵師とともに御用を勤めた、狩野派の表絵師・勝田狩野家の初代である。奥絵師とは、將軍に御目見えが可能で、旗本格の高い地位を持ち、幕府に直属した狩野家の絵師である。一方、

表絵師とは、狩野家の分家筋で、御目見え以下の御家人格として大名家や社寺等の御用を勤め、奥絵師を補佐するものである。

竹翁に関する先行研究は、管見の限り『國華』第一四四号（一九〇二年）での無名氏による《觀馬図屏風》（細見美術館蔵）の作品解説を初見とする²。また、これまでに河野元昭氏や榊原悟氏、門脇むつみ氏らにより事績の検討や作品紹介が行われ、徐々に再評価がなされている³。しかし、その制作活動については、竹翁を取り巻く人物や時代背景等を考え合わせればさらに研究の余地があると思われ、彼の画業を知る上でも、制作年が明らかな東博本は重要な作品と考えられる。

ところで、東博本には同時に作成されたと思われる共箱があり、箱蓋表と蓋裏の書付の豊富な情報からは、その制作の背景を窺うことができる。本論では、この共箱に記された内容から、従来の研究では言及されていない竹翁の制作活動の一端を明らかにすることを目指す。

一、東博本の概要

まず、東博本の概要について述べる。紙数の都合上、図様の詳細につ

いては以前の拙稿を参照していただきたい。⁴ 材質は絹本着色、法量は各一〇七・五×四〇・九（cm）であり、中幅に孔子像、右幅に顔子像、左幅に曾子像を配す三幅対である。款記は、孔子像の画面右やや下方に「勝田陽溪竹翁謹圖寫」、顔子像の右方に「奉納先聖先賢像 竹翁筆」、曾子像の左方に「萬治辛丑孟春壬申 竹翁筆」とあり、顔子像と曾子像とでは「筆（筆）」の字形を変えている（図2）。印章は三幅ともに「陽谿圖書印」朱文内方印、「竹翁」朱文方印が捺される（図3）。

曾子像の款記から、東博本の制作は万治四年とわかるが、この年は四月二五日までで、その後寛文に改元される。執筆者はこれまでに、道釈人物画、故事人物画、花鳥画等、竹翁の作品（真筆と判断し得たもの）を二〇点実見し、また他の絵師による模本は五点、文献や写真では五四点の作品を確認している。しかし、東博本ほど款記を長く丁寧に書いた作品は他に見られない（表）。「勝田陽溪竹翁」と姓と字、号を重ね、「謹圖寫」としている点、「先聖先賢像」という画を「奉納」とすると記す点、「萬治辛丑孟春壬申」と制作時期を具体的に示す点からは、竹翁が非常に厳肅な態度でこの三幅対の制作に臨んだことが窺える。また、本図を描き奉納することが、竹翁にとって非常に名誉な出来事であったことが想像される。この款記や印章、後述する図様の特徴から判断し、東博本は竹翁の真筆と考えられる。

「陽谿圖書印」朱文内方印は《梅竹図》（ボストン美術館蔵）（図4、5）、《虎図》（個人蔵）（図6、7）の二点と同じであるが、竹翁作品においてこの印が捺されることは少ない。⁵ 一方の「竹翁」朱文方印は、他に《鬼図》（早稲田大学中央図書館蔵）（図8、9）や《陶淵明図》（愛知・天桂院蔵）、《富士・三保松原図》（個人蔵）、狩野長信の子である昌信、清信との合作《維摩・龍虎図》三幅対（東京国立博物館

蔵）のうちの虎図と、現在までに五点の作品に捺されていることを確認している。

孔子は他の二像よりも一回り大きく描かれ、孔子を本尊、顔子、曾子を脇侍とする三尊形式のように表されている。孔子像は司寇冠を被り、白い內衣の上に薄墨色の燕服を身に着け、両手を胸前で組む姿で描かれる。頭髮、髭には白髪を交え、表情は視線がやや下方に向き、威厳のある様子である。

顔子像は頭に儒冠を戴き、その白い紐を顎の下で蝶結びする。橙色の內衣に薄水色の儒服を身にまとい、袖からは拱手にした右手親指をのぞかせる。頭髮、髭には所々に白髪が見られ、眉や目がつり上がり、その表情は見る者に独特の緊張感を与える。曾子像は顔子像と同様、儒冠を被り、白い紐を顎下で結ぶ。白い內衣に茶地の儒服を着用し、手指を見せずに両手を前に組む。表情は、穏やかながらも冷徹で生真面目な印象である。

これら三像は、共通して色数が抑制され、全体的に静かで荘厳な雰囲気強調する。衣服や冠の輪郭線、肥瘦のある衣文線は、やや速筆で引かれている。衣文の墨線には、衣服の色より一段階濃い色を重ねてグラデーションを施し、立体感を表している。このような表現は、竹翁筆《曾我物語絵巻》（図10、11）や《観馬図屏風》、《陶淵明図》等にも顕著である。また、額、目の周辺、頬等の顔貌、耳朶の線や手、白目の目頭、目尻にも細やかなグラデーションが付けられ、写実的な表現が試みられている。三像の威厳を伴う表情からは、儒教の教えの尊さ、あるいは先聖、先賢の聡明なさまが感じられる。三幅ともに非常に謹直な様子で描かれており、これらが竹翁の作品の中でも特別な意味を持つ礼拝像であることが強く窺われる。

二、勝田竹翁の御用および林家からの制作依頼

次に、東博本の筆者である勝田竹翁について述べる。竹翁の伝歴は、『古画備考』や『國華』第一四四号に掲載される、江戸時代後期の勝田家の子孫で、経師を職業とする勝田兼三郎や五郎左衛門による「由緒書」が参考となる。すなわち、竹翁は名を定則、貞則、土貞（ひじさだ）等といい、字は陽溪、沖之丞（隠岐之丞）と称し、竹翁のほか、翠竹庵、東濱等と号した。伊勢に生まれたが、先祖は三河国加茂郡（現在の愛知県豊田市、みよし市周辺）を出身とし、代々、勝田兵左衛門を名乗る同所の郷士（武士である一方、村落に土着して農業を営む者）を父とした。

慶長一八年（一六一三）切米二〇〇石と二〇人扶持を賜り、また、幕府の老中・大老を務めた土井利勝（一五七三—一六四四）に八歳で召され、「御側禿」あるいは「御側衆」として勤めたとされる。幼少期より絵を描き、国宝《花下遊楽図屏風》（東京国立博物館蔵）の筆者として知られる狩野長信（一五七七—一六五四）より画技を学んだ。寛永七年（一六三〇）四月には三代将軍家光（一六〇四—五一）の「御部屋絵師」を命じられ、帯刀を許され御用を勤めた。

竹翁の弟・兵左衛門は、絵師である竹翁とは異なるものの、絵に関する幕府の御用や経師等を勤めた。将軍宣下や代替り等の際には、将軍が天皇や公家に渡す砂金袋を準備する御用を勤め、また朝鮮人が来訪した際には、返書や屏風制作の準備等の御用も担当し、代々その職を継承したという。⁷

この「由緒書」は竹翁とその弟の事績が掲載されるが、江戸後期の狩野派絵師で鑑定家でもあった菅原洞斎（一七六二—一八二一）による

『画師姓名冠字類抄』（国立国会図書館蔵）には、文化四年（一八〇七）勝田卯兵衛により、勝田家初代・竹翁および経師等として御用を勤めた二代目から九代目までの経歴が記録されている。竹翁に関する先行研究ではこの記録について言及されていないが、『画師姓名冠字類抄』での竹翁の記述は先の「由緒書」とほぼ同文であることを指摘しておきたい。⁸

続いて、管見の限りではあるが、竹翁が勤めた幕府の御用を年代順に追っていきたい。まず、明暦元年（一六五五）徳川家綱（一六四一—八〇）の四代将軍襲職祝賀のために来日した、朝鮮通信使に贈呈する六曲二〇双屏風において、狩野探幽（一六〇二—一七四）らとともに制作を担当した竹翁が、うち五双という前例のない量を制作したことが指摘されている。また、「厳有院殿御実紀」の記述からは、万治元年（一六五八）閏二月一日以前に、家綱が竹翁筆「畫馬の屏風」を所蔵しており、大老・酒井忠勝（一五八七—一六六二）へ下賜したことが知られる。¹⁰

さらに、万治二年再建の、江戸城本丸御殿の諸室の障壁画制作において、画題や担当者が記される『御本丸御坐敷并御廊下絵様之覚』（仙台市博物館蔵）等の史料には、竹翁が探幽らとともに名を連ねており、他の絵師と同等、またはそれを上回る数を描いたことが示されている。¹¹

他に、「厳有院殿御実紀」の記述により、探幽と、同じく奥絵師で狩野宗家を継いだ安信とともに、寛文六年（一六六六）正月の「御絵始」のために登城し、家綱から安信と同等の俸禄を賜ったことが知られる。¹²

また、『寛政重修諸家譜』大久保忠朝（一六三二—一七二二）の項によれば、延宝八年（一六八〇）四月二七日家綱の御成に当たり、忠朝ら三人の老中が饗応を行った際、狩野元信筆「耕作図」、探幽筆「曲水」、尚

信筆「七賢」とともに、竹翁筆の屏風（画題不明）を家綱より下賜されたという。¹³これらの情報からは、竹翁が狩野家中枢の絵師の作品とともに、將軍らの嗜好に合った作品を残していたことがわかる。

一方、林羅山（一五八三—一六五七）以来、儒官として江戸幕府の学問を司った林家と、狩野派との画事をめぐる交流があったことがすでに指摘されているが、竹翁の作品や文献史料から、彼もまた林家の御用を多く勤めた絵師の一人として特筆されるべき存在といえる。¹⁴¹⁵例えば、

『画師姓名冠字類抄』によれば、竹翁は明暦元年六月中旬、家綱に近侍した内藤忠清（一六二二—一九〇）の依頼により、羅山とその三男・鷺峰（一六一八—一八〇）、四男・守勝（一六二五—一六六二）が撰じた『百人一首』（百人一首の中国詩人版。羅山撰の漢魏六朝三〇人、鷺峰撰の唐四〇人、守勝撰の宋三〇人から成る。内閣文庫蔵、写本は跡見女子大学図書館ほか蔵）の肖像を描き、奉納している。¹⁶

また、鷺峯の日記『国史館日録』からは、寛文五年（一六六五）鷺峯の依頼により、林家に蔵された朱子像に、竹翁が新たに朱子学の道統を示す黄幹像、真徳秀像を描き加え、『朱子・黄幹・真徳秀像』三幅対が完成している。さらに、同七年、竹翁は、鷺峯の子で二四歳の若さで早世した春信（一六四三—一六六六）の遺像制作まで行ったことが明らかである。¹⁷

このほか、埼玉・三芳野神社には竹翁筆、羅山撰『三芳野天神縁起絵巻』が伝来する等、竹翁が林家から絶大な信頼を得ていたことが窺える。また、『神農図』（東京藝術大学美術館蔵）や、それとは構図の異なる狩野雅信の模写作品（東京国立博物館蔵）が現存することから、中国古代の聖帝の一人であり、儒教とも深く関連する神農の図を竹翁は少なくとも二点描いていたと判断できる。

幕府のブレンである林家からたびたび御用を請けた竹翁の画業において、当時の政治や思想に重大な役割を果たした儒教絵画というジャンルは、大きな位置を占めるものであっただろう。竹翁は、林家から厚い信頼を受け、また画力も認められ、儒教画題を描くにふさわしい絵師と見なされていたと考えられるのである。

さらに、江戸幕府作事奉行の配下・御大工頭で、江戸城内外の建造物や日光東照宮等、將軍家ゆかりの社寺、靈廟の造営・修築等を勤めた鈴木長常（一六二三—一九六）、長頼（一六五五—一七〇五）父子による日記『鈴木修理日記』¹⁸は、竹翁の事績を補完し得るものであることを提起したい。例えば、寛文一〇年九月二五日には、長常が竹翁（陽溪）宅へ食事を振る舞ったこと、翌年正月一〇日にも長常が竹翁らに馳走を出したこと、同年五月二二日には長常が竹翁を訪ねていること等が挙げられる。¹⁹竹翁の存命期に書かれたこの日記からは、彼が幕府の画工という立場で、御大工頭・長常らとともに御用を勤め、また彼らと親しく交流していたことが読み取れるのである。

以上のように、竹翁は、奥絵師に準じる表絵師であるにもかかわらず、その活躍は表絵師の中でも突出したものであった。中でも、鈴木長常の日記に見られる、長常と竹翁その人の生き生きとした交流はたいへん興味深い。御大工頭にとって画工との交流は、普請を円滑に進めるための打ち合わせや人間関係の構築等重要な意味をもつものであっただろう。

次に、東博本の共箱を通して、竹翁が幕府の中核で画業を行い得た背景について考察してみたい。

三、東博本の共箱について

東博本の共箱の箱蓋表には、金字で以下の書付がある（図12）。

勝田陽溪竹翁 奉圖
左顔子
三幅一對 先聖像
右曾子

孔子像、顔子像の款記の一部「勝田陽溪竹翁」、「奉」、「先聖」、「像」が箱蓋表の同字と字形が近く、この書付は竹翁自身の筆と考えられる。蓋裏には朱漆により以下のように書かれている（図13）。

萬治辛丑正月壬申
御表具 牧隆元
岡本松軒
片山源右衛門
原田小右衛門
長曾根才市
高井助左衛門
未得
勝田兵左衛門
石田仁兵衛
近藤久兵衛
伊野猪兵衛

村上忠兵衛
直長
正吉
綱廣
山本正言
御軸金物 松田次右衛門
御筥 栗本太郎右衛門
栗本所左衛門

蓋表の書付から、東博本は制作当初から先聖（孔子）像、顔子像、曾子像の三幅対であったことがわかる。画中の款記と同様に、勝田竹翁がこの三幅対を描き、奉納した旨が記されている。

蓋裏の冒頭には「萬治辛丑正月壬申」とあり、東博本が万治四年正月二一日に奉納されたものと理解できる。そして、「御表具」には一六名、「御軸金物」には一名、「御筥」には二名、それぞれ人物名が記される。これらの項目は、文字どおり表具、軸頭の金飾り、共箱を意味するものと考えられる。²⁰

次に、列記された人物について項目ごとに見てみよう。²¹ まず、「御表具」筆頭の牧隆元（生没年不詳）は、林羅山に近侍した者である。

隆元は、羅山が酒井忠勝の依頼により、全八五条をもって神道を解説した『神道伝授抄』（東京大学史料編纂所蔵）における、林家旧蔵本系統の写本の善本（東北大学附属図書館蔵、神宮文庫蔵）に、寛文四年（二六六四）正月付で識語を記している。その内容は、「羅山は本書を忠勝に献じたが、彼は原稿を深く箱底に蔵し、忠勝も秘したため、世にこれを見る者がなかった。そこで、羅山に近侍する者たちが、彼の留守中

に密かに少しずつ年月をかけて書写し、ついに全てを写し終えた。古今の儒者の中で羅山ほど博識で記憶力の優れた者はいない。彼は神道を崇敬し、仏教を排斥すべきことを知っていた。しかし忠勝は仏教を重んじ、甚だ僧侶を愛したために、羅山はその心に従った。そのため、本書が仏教の説を交えている点は惜しいものだ。これが『神道伝授抄』成立の一部始終である。」と要約できる。²² この識語にあるように、隆元が『神道伝授抄』の成立事情を写本の識語として書き加える立場にあったことが注目される。

隆元の女は、羅山の弟子である深尾永常（一六四〇—一七一五）の妻となっている。永常は寛文六年に家綱に拝謁し、宝永六年（一七〇九）に評定所勤役儒者となっており、子孫も代々その職を務めた。²³ これらのことから、隆元は、当時林家の周辺にあり、儒学に深く関わる人物であったと考えられる。現時点では、彼の生没年を知る手がかりを見つけれられていないが、当然ながら万治四年には生存していたことは明確である。

二番目の岡本松軒であるが、残念ながらこの人物については諸文献史料から名を見い出すことができなかった。ただし、寛永九年（一六三二）六月の台徳院靈廟の造営の際、普請下奉行として「岡本作右衛門尉高直」なる人物が携わっていることが明らかであり、²⁴ あるいはその親族である可能性もあるだろう。

三番目の片山源右衛門は武蔵国出身で、代々、江戸幕府作事方に勤めた片山氏がこの名を襲名している。万治四年当代の源右衛門は、台徳院靈廟の造営に携わる等活躍した父・國久の養子であり、同二年より父を継承した御被官大工（御大工頭の指揮を受け、工事設計と職人たちの監督にあたる）・片山久遠（三七郎、一六二七—八九）である。²⁵

四番目の原田小右衛門であるが、この人物も史料での同定が叶わなかった。ただし、『寛政重修諸家譜』原田氏の項に、祖父・正信が竹翁の先祖と同じ三河国加茂郡出身で、祖父と同様「小右衛門」を名乗る原田正之（生没年不詳、家綱在職期（一六五一—八〇）頃活動か）なる人物の存在が確認された。²⁶ 彼は国廻の役（幕府が大名や旗本の監視と情勢調査のために派遣した巡見使）を勤めたという。竹翁ゆかりの人物として、この蓋裏に名を連ねた可能性を示しておきたい。

五番目の長曾根才市（生没年不詳）は、代々、幕府作事方の鍛冶師がこの名を襲名しており、建築金具の制作者として従事したともいわれている。一方、越前国の刀工として万治期（一六五八—六一）頃に活動していたことも知られる。²⁷ 六番目の高井助左衛門（生没年不詳）もまた幕府作事方の世襲の鍛冶師であり、台徳院靈廟の造営にも携わっている。²⁸

次に、七番目の未得という姓のない人物は、江戸前期の俳人である石田未得（一五八七—一六六九）であろう。未得は江戸に生まれ、俳人・歌人として著名な松永貞徳（一五七一—一六五三）に師事した。正保期（一六四四—四八）頃より活躍し、廻文俳諧や狂歌にすぐれ、狂歌集『吾吟我集』等の著作を残している。故あって相州に隠れた後、江戸の神田鍋町に住んだという。²⁹

八番目の勝田兵左衛門は、先述の「由緒書」にある、幕府の御用で経師等を勤めた竹翁の弟であろう。³⁰ 従来は文献史料にその存在が知られるだけであったが、この蓋裏の記述により彼の活動が実証されよう。

九番目の石田仁兵衛、一人を置いて一一番目の伊野猪兵衛、一二番目の村上忠兵衛は残念ながら現時点で不明であるため、彼らの事績の検証は今後の課題としたい。一〇番目の近藤久兵衛は弓師である。³¹

続いて、姓のない人物が三名続く。まず、二人置いて一五番目の綱廣

は、刀工の伊勢大掾綱廣（相州綱廣）の五代・山村弥右衛門（一六一六—一九八）であると思われる。綱廣は万治三年五月一九日に伊勢大掾を受領し、延宝（一六七三—一八一）末年頃に伊勢守に転じた。《大身槍 銘相州住綱広》（東京国立博物館蔵）や《脇差 銘相州住伊勢大掾源綱廣》（東京富士美術館蔵）等の作品が現存している。³²

一三番目の直長の詳細は不明であるが、綱廣と同じく刀工で、室町末期から数代続き、「越州直長作」銘のある作品等を残す石塚右衛門直長（生没年不詳）であろうか。³³一四番目の正吉も刀工関係の人物と仮定すれば、寛文期（一六六一—一七三）頃に活動し、「武州住正吉」銘のある《のし透》（岩手県立博物館蔵）等を制作した小田原伊藤派の鐔工・正吉（生没年不詳）の可能性がある。³⁴現段階では、直長、正吉は名のみで記されることが多い刀工や鐔工と比定するが、彼らの事績についても引き続き分析していきたい。

そして、「御表具」末尾の山本正言（生没年不詳）は張付師（紙、裂地、糊を使い表具の仕事を行う職人）である。³⁵以上が「御表具」の一六名である。

続いて、「御軸金物」は松田次右衛門の一名で、恐らく金物師や鋳師等であると思われるが、この人物も詳細不明である。そして、「御筥」は両名とも栗本姓である。太郎右衛門は幕府作事方の蒔絵師または塗師であり、元禄二年（一六八九）の日光東照宮や延宝八年の寛永寺の家綱廟造営等に携わっている。³⁶所左衛門もまた、蒔絵師や塗師として活躍している。³⁷

以上が蓋裏に記述された一九名であり、蓋表に書付のある竹翁と合わせ、総勢二〇名である。二〇名のうち、現時点で確実にその職が判明しているのは、御用絵師（画工）が一名（竹翁）、林家に近侍した者が一

名（牧）、幕府作事方の御被官大工が一名（片山）、幕府作事方に所属する者を含む職人が七名（長曾根・高井・勝田兵左衛門・近藤・山本・栗本両名）、俳人が一名（未得）、刀工が一名（綱廣）である。彼らの多くは、江戸幕府に関する普請や幕府の御用を勤めた職人であることがわかる。

彼らは、東博本の表具、軸の金飾り、箱の制作をし、竹翁が描いたこの三幅対を然るべき場所へと奉納したのであろう。しかし、経師の勝田兵左衛門、張付師の山本正言は表具、塗師・蒔絵師の栗本太郎右衛門・所左衛門は共箱の漆塗りを担当することが可能であろうが、他の者は職種が異なり、特に牧隆元や未得は職人ではない。このことから、蓋裏に名を連ねた人物は、竹翁の作品を奉納するにあたり、その制作費や材料の購入費を工面し、あるいは技術を提供したものととらえるべきであろう。

さらに、彼らはこの作品の注文主と何らかの関係があり、二〇名同士においても交流があったと窺える。また、彼ら職人の多くや俳人・未得は神田を住まいとしたため、地縁関係により本図を奉納した可能性もある。いずれにせよ、この東博本の共箱の書付は、竹翁の制作環境やその活動をめぐるネットワークを知ることができる格好の例と見なすことができる。

次に、東博本の奉納先を考えてみたい。残念ながら、現時点では万治四年一月二日に竹翁らがこの《孔子・顔子・曾子像》を奉納したことを示す文献史料を見つけれられていない。しかし、竹翁が幕府の御用を勤めており、蓋裏の人物の多くが幕府関係の重要な普請を担当した職人であることから、本図もまた幕府に深く関わる場所に奉納されたと考えられるのである。特に、竹翁は林家との関わりも深く、「御表具」筆頭で

ある牧隆元が羅山に近侍していたことから、東博本は、幕府や林家周辺において儒学に傾倒する有力な人物を意識し、隆元らが竹翁に制作を依頼したものと想起されるのである。

また、東博本が制作された万治四年は寛文元年に改元されることは既に述べたが、同年は後の湯島聖堂となる、上野忍岡の地に建てられた林家の学問所が改築された年でもある。この改築は、明暦三年（一六五七）の江戸の大火により焼失した先聖殿（孔子廟）や林家の住宅、私塾を再建するもので、竣工前年の万治三年一二月に幕府より命じられたものであった。しかし、加えて諸門や修史事業を行う部屋、書庫等も完備されるという大改築であり、幕府においても学問所の公的な性格を認めるものであったとされる。

この大改築は鷲峰の要請に端を発したが、將軍家綱の強い意向が反映されたものでもあった。すなわち、家綱は明暦二年（一六五六）に羅山を召して『大学』を講じさせて以来、儒学を崇敬するようになり、書庫や江戸の大火で失われた書籍、購書料等を林家に援助するようになった。また、家綱は学問所の大改築にあたり費用五〇〇両を与え、老中・稲葉正則（一六二三―九六）に命じ、鈴木長常や同じ大工頭である木原義永等に普請を担当させた。そして、改築された学問所は寛文元年六月に竣工した。³⁹

蓋裏にある万治四年正月という年紀は、寛文元年の改元直前である。推測の域を出ないが、この時の学問所の普請の一部は、鈴木長常以下、蓋裏の職人たちが担当したのではないだろうか。そして、「御表具」筆頭の牧隆元を中心に、同じく林家との関わりの深い竹翁や蓋裏の人々が学問所の大改築を記念し、林家や家綱へ向けて東博本を奉納した可能性も考えられる。隆元が羅山に近侍していたことや、鈴木長常の日記に竹

翁や蓋裏の職人らが登場することからも、この推論は裏付けられるのではないだろうか。⁴⁰

竹翁が家綱襲職祝賀のために来日した朝鮮通信使への贈朝屏風を数多く担当したことや、家綱が竹翁筆の「畫馬の屏風」を所蔵していたこと、家綱在职期の江戸城障壁画制作等、家綱と竹翁との関係に鑑みても、家綱が大きく関与した林家学問所の大改築の際、竹翁らが東博本を奉納したという説が提示できるものと思われるのである。

おわりに

本稿では、東博本《孔子・顔子・曾子像》の概要を確認し、勝田竹翁の画業において、幕府の御用、とりわけ竹翁と將軍家綱との絵画をめぐる関わりや、竹翁が代々儒官として幕府の学問を司った林家から多くの絵画制作の依頼を請けていたことを述べた。これらの状況を踏まえ、東博本の共箱の書付から、林羅山に近侍した牧隆元が中心となり、竹翁や学問所の普請を請け負った職人たちと力を結集し、同所のリニューアルを記念して林家や家綱へ向けて《孔子・顔子・曾子像》という礼拝像を奉納したものであるという推論を提示した。

東博本の奉納を示す文献史料を見つけないこと、箱蓋裏に列記された人物においてその事績を見い出せない者が数名いることは誠に残念ではあるが、まるで棟札のように共箱にこれほどまで人物名や情報を記す例は他に見当たらない。東博本やこの共箱は、万治四年当時の表絵師（画工）・竹翁と、林家周辺の人物、職人、俳人らとの人間模様や、竹翁の制作活動における新たな一側面を伝えてくれるものと言える。

このように、竹翁は江戸前期の狩野派に大きく貢献した表絵師であったと判断されるが、今後も竹翁の画業を追うことのできる作品や一次史料を収集し、彼が果たした役割や、奥絵師や他の表絵師との関連における具体的な位置を明らかにすることを目指したい。また、幕府周辺の人物との関連において、彼が絵師の職に就き得た具体的な背景等についても検証し、併せて江戸後期に至るまで幕府の御用を勤め続けたとされる勝田狩野家の明確な動向についても究明していきたい。

註

- 1 拙稿「勝田竹翁筆『孔子・顔子・曾子像』について」守屋正彦『礼拝空間における儒教美術の総合的研究』科学研究費補助金 基盤研究(B) 研究成果報告書 筑波大学日本美術史研究室 二〇一四年三月 一四三―一五八頁。
- 2 無名氏「勝田竹翁筆 調馬図」『國華』第一四四号 國華社 一九〇二年五月 一九三―一九四頁。続いて、藤懸静也「勝田竹翁筆山水図」『國華』第六三〇号 一九四三年五月 一五三―一五四頁、同「勝田竹翁筆靈照女図」『國華』第六三四号 一九四三年九月 二六六頁、近藤喜博「河越三芳野天神縁起」『國華』第六八五号 一九四九年四月 一〇〇、一〇九頁等でも作品解説がなされている。
- 3 河野元昭「勝田竹翁筆 唐獅子・牡丹図」『國華』第九二四号 一九七〇年七月 三一―三五頁、同「禽鳥図屏風」解説」平山郁夫、小林忠編著『秘蔵日本美術大観 八 ケルン東洋美術館』講談社 一九九二年 二二六―二二七頁、榊原悟『美の架け橋』ぺりかん社 二〇〇二年、門脇むつみ「勝田竹翁筆「観馬図屏風」について―徳川家綱との関わりから」佐藤康宏編『美術史家、大いに笑う―河野元昭先生のための日本美術史論集』ブリュッケ 二〇〇六年 三〇九―三二六頁。ほか、稲葉二柄「勝田陽溪と曾我物語絵巻―翻刻・東京国立博物館蔵『富士牧狩』―」『大妻国文』第二一号 大妻女子大学国文学会 一九九〇年三月 五七―八五頁、宮腰直人「勝田竹翁筆『富士牧狩』考」『曾我物語』研究序説」立教大学日本文学』第一一一号 二〇一四年一月 九七―一〇六頁等文学の観点からも研究がなされている。
- 4 前掲註1。
- 5 このほか、後述する『画師姓名冠字類抄』（国立国会図書館蔵）やその類本『画師冠字類考』（西尾市岩瀬文庫蔵）の竹翁の項には、画題不明ながら款記「六十八冬 竹翁圖之」とともにこの印章が捺される作品の存在が示されている。
- 6 『古画備考』（朝岡興禎『古画備考』下巻 思文閣 一九七〇年 一七九―一七九二頁）では勝田兼三郎、前掲註2無名氏「勝田竹翁筆 調馬図」一九三頁では勝田五郎左衛門によるものが掲載される。その内容はほぼ同じであるが若干の異同があり、異本から引用されたことがわかる。
- 7 兵左衛門については、江戸で勝田兵左衛門なる徳川家の屏風張付の御用を勤める者がいるが、職業を絵師としないことや（『画事備考』黒川真頼等校訂『扶桑名画伝』五 哲学書院 一八九九年 六三六頁）、『画事備考』の記述のとおり、竹翁以降の勝田家は表具師となったのだろうという所見が述べられてきた（田島志一『東洋美術大観』第五冊 審美書院 一九〇八年 四二五頁）。
- 8 『画師姓名冠字類抄』は竹翁の存命期より一〇〇年以上後に著された二次史料である。しかし、他のいずれの文献よりも竹翁に関する記述が多く、勝田家に関する新知見を含むことが予想されるため、別途翻刻を予定している。

- 9 武田恒夫『狩野派絵画史』吉川弘文館 一九九五年 三三六頁、前掲註3 榎原氏著書 一五三一―一五四、一八一頁。
- 10 黒板勝美編『徳川実紀』第四篇 吉川弘文館 一九九二年 二九〇頁。
- 11 榎原悟『狩野探幽 御用絵師の肖像』臨川書店 二〇一四年 二三五、二三六頁。
- 12 前掲註10五五九頁。
- 13 高柳光寿、岡山泰四、斎木一馬編『寛政重修諸家譜』第一 続群書類従完成会 一九六六年 三八三頁。
- 14 山下善也『探幽絵画にみる叙情―林鶯峰『富士石記』を起点に』『美術フォーラム21 特集 日本美術の叙情性―情趣の系譜』美術フォーラム21刊行会 二〇〇七年等。
- 15 前掲註3 河野氏『禽鳥図屏風』解説』一二七頁。
- 16 なお、寛文九年一〇月には一二人の僧や女性を加え、竹翁はその肖像も描いている。山本武夫校訂『国史館日録』第四 続群書類従完成会 一九九九年 七一、七二頁。
- 17 『鶯峰林学士詩集』巻第六九（国立国会図書館ほか蔵）、『国史館日録』寛文五年（一六六五）一月朔日の条。なお、同日には、鶯峰が竹翁の子・貞寛に対し、画事を労うために『三才図会』一冊、『唐詩画譜』二冊を貸与した旨が記されている（前掲註16 一四八頁）。
- 18 寛文一〇年（一六七〇）から宝永三年（一七〇六）まで（途中欠落あり）。
- 19 ・寛文一〇年九月二五日の条（略）一、朝食、能登守にて被下、其より大和殿江御見廻申、帰宅、晩は陽溪方へ振舞。」
・寛文一一年正月一〇日の条「一、無別条、永竹・陽溪・香庵江料理出ス。」
・寛文一一年五月二二日の条（略）一、晩八、陽溪方へ振廻参がけ二、鈴木八右・新蔵殿・五郎太江見舞、夫より陽溪方へ参、伝兵衛殿・左近殿

- 御出、六ツ半時分帰ル。」鈴木棠三、保田晴男編『近世庶民生活史料 未刊日記集成（第三巻）』鈴木修理日記（一）三一書房 一九九八年 七、一四、二三頁。
- 20 現状では箱蓋裏に記される「御軸金物」に相当する軸飾りがなく、共箱の軸受けも現在の形とは異なることから、万治四年に制作されて以降、軸頭が付け替えられていることがわかる。また、箱側面の両側には紐留めの金具を打った跡が残っている。
- 21 一次史料である『鈴木修理日記』をはじめ、『武鑑』、『寛政重修諸家譜』、『東京市史稿』等の関連資料を適宜参照した。
- 22 識語は以下のとおり。「林道春纂述此編、以猷源君忠勝酒井讃岐守、其稿則深蔵箱底矣、兩人共秘而無有世視之者也、然道春近侍之徒、間窺其他出、而潜書一行二行、或一句半章、積月累歲、終以得為全焉、頃年僕嘗聞本朝古今之儒、博学強記、無如於道春者矣、顧夫広才如彼而豈有不知於神道之可崇敬、釈氏之可排斥者也歟、蓋忠勝者、素重仏教甚愛僧侶、故順其心而此編猶雜浮屠氏之説矣、朱紫混淆、邪正不分、僕甚惜之、然無所避焉、書写如本也、而聊記所以伝来之始末、請君正之云、寛文第四歲次甲辰正月日 撰陽牧隆元農叔謹書」。署名には「撰陽」とあるため、隆元は撰津国の人であったか。財団法人神道大系編纂会編、発行『神道大系 論説編二十 藤原惺窩・林羅山』一九八八年 石田一良解題四七頁 高橋美由紀解題五九頁、矢崎浩之「林羅山『神道秘伝折中俗解』小考」『神道宗教』第一三三三号 神道宗教学会 一九九八年二月 六八、六九頁。
- 23 『寛政重修諸家譜』における永常の項では、妻は「藤堂和泉守家臣牧隆元某が女」とあり、三河国岡崎藩の儒学者・近藤瓶城による『儒職家系』の永常の項には、妻は「安藤対馬守医師牧隆元某女」とある。隆元は羅山の近侍でありながらも藤堂和泉守（藤堂高次（一六〇二―一七六六）か）の家臣、あるいは安藤対馬守（安藤重信（一五五七―一六二一）または重博

（一六四〇—一九八）の医師であったことが窺われる。前掲註13『寛政重修諸家譜』第七 三〇六頁、近藤瓶城編『改定史籍集覧』第一九冊 臨川書店 一九八四年 六八、六九頁。

24 霊廟の霊屋本殿の床下から発見された石刻名による。港区立郷土資料館編、発行『増上寺徳川家霊廟』二〇〇九年 一六頁。

25 片山源右衛門は『鈴木修理日記』にも数多く登場する。片山氏は、慶長一三年（一六〇八）本門寺五重塔、元和三年（一六一七）神田明神、元和五年（一六一九）東照宮中神庫等の棟札にも名前がみえ、大工頭の木原氏・鈴木氏・中井氏とともに江戸初期から幕府直営の建築を代々担当した。前掲註13『寛政重修諸家譜』第二〇 二六六、二六七頁、大河直躬「幕府の建築と作事方」『世界建築全集3 日本Ⅲ 近世』平凡社 一九五九年 六七—六九頁、永井康雄『近世造営組織と建築技術書の変遷に関する研究』東北大学提出博士論文 一九九七年 一六頁。

26 祖父・正信は、三河国足助城主・鈴木重直と領地を争う際、一族の原田種友とともに家康の家来となり、その後も加茂郡に閑居した。前掲註13『寛政重修諸家譜』第二二 三三八、三三九頁。

27 清水孝教『刀工鐔工辞典』一九二八年（芳賀登・杉本つとむ・森陸彦・阿津坂林太郎・丸山信・大久保久雄編『日本人物情報大系』第八七巻 皓星社 二〇〇一年 一四七頁）。小笠原信夫「新刀」『日本の美術』一五五至文堂 一九七九年 一三頁。また、『武鑑』天和元年（一六八一）版、同三年版には「銀町一丁目御鍛冶や」とある（橋本博編『改訂増補 大武鑑』名著刊行会 一九六五年 一八一、二〇八頁）。このほか、元禄一〇年八月二六日に名を連ね、肩書は「同断（御作事支配）鍛冶師」とある（東京市役所（現東京都公文書館）編『東京市史稿』市街篇第一三 臨川書店 一九九五年 三六八頁）。

28 『鈴木修理日記』にも多く登場する。台徳院霊廟の石刻名にも「鍛冶大

工」の項に「高井助左衛門尉吉次」とあり、その建築にも携わったことが知られる（前掲註24）。『武鑑』宝永元年（元禄一七年（一七〇四）版には「御鍛冶師かんだかち丁」とある（前掲註27『改訂増補 大武鑑』三二六頁）。長曾根才市と同様、「徳川綱誠其他家舗給賜」に名を連ね、肩書を「同断（御作事支配）鍛冶頭」とする（前掲註27『東京市史稿』市街篇第一三 三六七頁）。

29 未得の生涯については、森川昭「江戸貞門俳諧の研究」『成蹊論叢』別第一号 成蹊高等学校 一九六三年 九三—一三七頁に詳しい。子で同じく俳人の未琢は『鈴木修理日記』にも多く登場する。

30 『武鑑』天和元年版、同三年版、元禄四年（一六九二）版には、勝田兵左衛門は「神田ぬし町同（御経師や）」とある。前掲註27『改訂増補 大武鑑』一八一、二〇八、二七五頁。

31 『武鑑』天和元年版には「神田こんや町御弓や」、同三年版には「神田衣や丁御弓や」、元禄四年版には「御弓し」とある。前掲註27『改訂増補 大武鑑』一八一、二〇八、二七五頁。

32 室町時代末期から明治まで一五代が同名を襲名した。福永醉剣『日本刀大百科事典』第三巻 雄山閣出版株式会社 一九九三年 二七一頁、富田正二『日本新刀人名辞典』一九四二年（前掲註27『日本人物情報大系』第八七巻 二一七頁）。

33 飯田一雄『日本刀工 刀銘大鑑』淡交社 二〇一六年 四九〇頁。

34 岩手県立博物館編、発行『鐔に見る日本の意匠』一九八五年 一五一頁。

35 『武鑑』天和元年版、同三年版には「通新石丁御張付や」、元禄四年版には「銀丁御張付師」として記録されている。前掲註27『改訂増補 大武鑑』一八一、二〇八、二七五頁。また、『鈴木修理日記』に数多く登場する。なお、同書には「小右衛門」、「仁兵衛」なる人物も登場するが、四番目の「原田小右衛門」、九番目の「石田仁兵衛」と同一人物かは不明であ

る。

36 栗本氏では同時期に俗称を太郎右衛門とする者は、栗本光屋（みついえ）と茂利の両名がいる。光屋は寛永寺の徳川家綱廟造営の際、廟扉の蒔絵制作に携わった。翌年の家綱の正室・高巖院（一六四〇―一七六）の廟にも、他の職人とともに蒔絵制作を行った。一方、茂利は日光東照宮造営の際、他の職人とともに蒔絵を制作した。風俗絵巻図画刊行会編『蒔絵師伝 塗師伝』吉川弘文館、一九二五年（前掲註27『日本人物情報大系』第八七巻 六一六、六二〇頁）。また、長曾根才市、高井助左衛門と同様、「徳川綱誠其他家鋪給賜」に名を連ね、肩書を「同断（御作事支配）蒔絵師」とする（前掲註27『東京市史稿』市街篇第一三 三六八頁）。

37 栗本所左衛門尉信政は、台徳院靈廟造営の一部を担当した。前掲註24。

38 慶安四年（一六五一）一一歳で將軍となった家綱は、生来學問を好む方ではなかったが、補佐役の保科正之の懸命な助言の甲斐があり、この講義は実現したという。須藤敏夫『近世日本積奠の研究』思文閣出版 二〇〇一年 一九頁。

39 犬塚遜『昌平志』卷第二・事実誌 明暦三年の条、万治三年一二月の条（同文館編輯局編『日本教育文庫』第八 同文館 一九一〇年 五四、五五頁）、「巖有院殿御実紀」万治元年三月一三日・同年四月一〇日の条（前掲註10 二六一、二六四頁）。

図版典拠

図1・3・12・13 東京国立博物館提供。

図4・5・10・11 ボストン美術館提供。

図6・7 執筆者撮影。

図8・9 早稲田大学中央図書館提供。

【付記】 本論文は、公益財団法人 出光文化福祉財団の平成二七年度調査・研究助成による成果の一部です。作品調査にあたり、東京国立博物館、米国・ボストン美術館、東京藝術大学美術館、早稲田大学中央図書館特別資料室、細見美術館、天桂院、個人のご所蔵家の方々よりご高配を賜りました。この場をお借りして御礼申し上げます。

表 勝田竹翁作品リスト（未定稿）

※ここでは基本的に執筆者が実見した作品に限定（No.11、17、18、23、25は写真や文献で確認）。

No.	作品名	所蔵先	制作年	材質形状	員数	法量(本図のみ)	款記	印章	出典
1	孔子・顔子・曾子像	東京国立博物館	万治四年(一六六一)	絹本着色	三幅	各一〇七・五×四〇・九cm	中「勝田陽溪竹翁謹圖寫」 右「奉納先聖先賢像 竹翁筆」 左「萬治辛丑孟春壬申 竹翁筆」	各「陽谿圖畫印」朱文円内方印、「竹翁」朱文方印	
2	曾我物語絵巻	ボストン美術館	万治三年(一六六〇)	紙本着色	二巻	一巻三六・〇×二〇九六・九cm 二巻三六・〇×二七二一・五cm	一巻「萬治庚子孟秋日 勝田陽溪圖之」 二巻「萬治庚子初秋日 勝田陽溪畫之」	各「翠菴之印」朱文長方印	『ボストン美術館日本美術調査図録 第二次調査』、ボストン美術館 HP データベース
3	神農図	東京藝術大学美術館	延宝元年(一六七三) 木庵性瑫(一六一一—一八四) 賛	紙本墨画	一幅	八八・五×三五・三cm	「竹翁圖之」	「貞寛」朱文袋形印	東京藝術大学大学美術館 HP 収蔵品データベース
4	三芳野天神縁起絵巻	三芳野神社	寛永五年(一六二八) か	紙本着色	一巻	三六・〇×一六五一・〇cm	なし	なし	『小江戸川越江戸絵画 職人尽絵と三十六歌仙額』
5	鬼図	早稲田大学中央図書館	江戸時代(一七世紀)	絹本着色	一幅	四四・三×五九・五cm	「竹翁圖」	「竹翁」朱文方印	早稲田大学図書館 HP データベース
6	陶淵明図	天桂院	江戸時代(一七世紀)	紙本淡彩	一幅	四一・五×七二・四cm	「翠菴竹翁」	「竹翁」朱文方印、「貞寛」朱文袋形印	『國華』第一三六四号
7	宇治川先陣争図屏風	東京藝術大学美術館	江戸時代(一七世紀)	紙本金地着色	六曲一隻	一七一・〇×四二六・六cm	「竹翁筆」	「竹翁圖畫」朱文方印	東京藝術大学大学美術館 HP 収蔵品データベース
8	観馬図屏風	細見美術館	江戸時代(一七世紀)	紙本着色	六曲一双	各一四二・四×三六五・四cm	なし	「貞寛」朱文袋形印	『細見美術館ニュースレター』一〇
9	琴棋書画図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	絹本着色	双幅	各九三・〇×三六・〇cm	各「竹翁筆」	「翠菴之印」朱文長方印	
10	靈照女図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	絹本墨画淡彩	一幅	二九・九×四六・七cm	「竹翁圖之」	「貞寛」朱文袋形印	
11	靈照女図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	絹本着色	一幅	三尺一寸三分×一尺九分	「竹翁圖之」	「翠菴之印」朱文方印か	『國華』第六三四号
12	観音図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	絹本着色	一幅	九〇・〇×四九・〇cm	「竹翁謹図寫」	「翠菴之印」朱文長方印、「貞寛」朱文袋形印	
13	白衣観音図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	絹本墨画淡彩	一幅	九四・二×三三・三cm	「竹翁圖之」	「貞寛」朱文袋形印	
14	虎図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	絹本着色	一幅	一〇二・〇×三八・五cm	「竹翁図之」	「陽谿圖畫印」朱文円内方印	
15	虎図(維摩・龍虎図)	東京国立博物館	江戸時代(一七世紀)	絹本墨画	一幅(三幅)	八三・三×三二・七cm	「竹翁圖之」	「竹翁」朱文方印	
16	龍図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	絹本着色	一幅	九九・〇×五四・〇cm	「竹翁筆」	「竹翁圖畫」朱文方印	
17	唐獅子・牡丹図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	絹本着色	三幅	各一四〇・七×六七・二cm	中「東濱翠菴竹翁圖」右左「竹翁筆」	各「竹翁圖画」朱文方印	『國華』第九二四号
18	禽鳥図屏風	ケルン東洋美術館	江戸時代(一七世紀)	紙本着色	六曲一双	各一六一・二×三五〇・四cm	右「竹翁圖」左「竹翁筆」	各「翠菴之印」朱文長方印	『秘蔵日本美術大観 八 ケルン東洋美術館』
19	枯木二鳩図	個人蔵	江戸時代(一七世紀)	紙本墨画	一幅	九四・五×二七・五cm	「竹翁書」	「翠菴之印」朱文長方印	

20	蓮鷺図	東京国立博物館	江戸時代 (一七世紀)	紙本墨画	一幅	八五・四× 三三・六cm	「竹翁筆」	印文不明朱文方 内円印、「學雄」 朱文壺型印	
21	梅竹図	ボストン美術館	江戸時代 (一七世紀)	絹本墨画	双幅	各一二四・五× 四五・六cm	右「竹翁畫之」 左「竹翁耄筆」	「陽谿圖畫印」朱 文内方印	『ボストン美術館 日本美術調査図 録 第二次調査』、 ボストン美術館 HP データベース
22	梅月図	個人蔵	江戸時代 (一七世紀)	紙本墨画	一幅	一一五・〇× 三六・六cm	「竹翁書」	「翠菴之印」朱文 長方印	
23	牡丹図	個人蔵	江戸時代 (一七世紀)	絹本着色	一幅	三二・五× 三三・五cm	「竹翁筆」	「翠菴之印」朱文 長方印、「貞寛」 朱文袋形印	
24	富士・ 三保松 原図	個人蔵	江戸時代 (一七世紀)	紙本墨画	三幅	各一一一・四× 四一・八cm	中「竹翁圖」右 「竹翁筆」左「竹 翁筆」	「竹翁」朱文方印	
25	山水図	個人蔵	江戸時代 (一七世紀)	絹本墨画	一幅	七寸五分× 一尺一寸七分	「竹翁筆」	「貞寛」朱文袋形 印	『國華』第六三〇 号